

バベシュ・ボヤイ大学交換留学報告書

氏名	梅田小桃未
学部/研究科・学年（留学時）	法文学部/人文社会学科（2年生）
留学国名	ルーマニア
留学期間	12 カ月
実施年月	2024 年 2 月 23 日～2025 年 3 月 8 日

1. はじめに

私は、2024 年 2 月 23 日から 2025 年 3 月 8 日までの約 1 年間、ルーマニアのクルージュにあるバベシュ・ボヤイ大学で交換留学を行った。



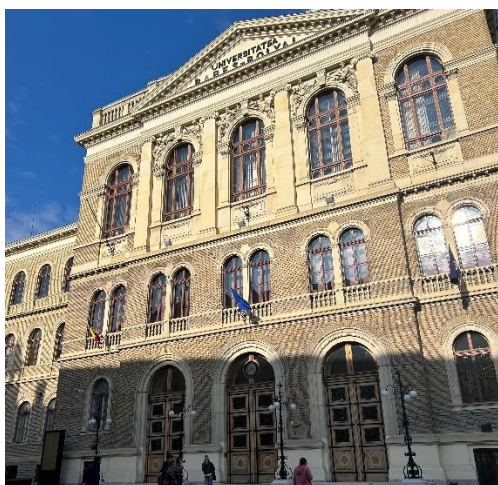
クルージュの街並み

2. 留学をしようと思った理由

これまで継続してきた「挑戦すること」を続けたいという思いと、将来は国際的な視野を持って日本に貢献できる人になるために、様々な経験をしたいという思いから、長期の海外留学をすることを決めた。

3. その大学を選んだ理由

私がルーマニアのクルージュへ留学したいと思った理由として、まずは、歴史的、民族的に東ヨーロッパに興味があったことが挙げられる。東欧は西ヨーロッパやロシア、オスマントルコといった勢力がぶつかる地点に常にあった。多民族からの支配や国境の変動を何度も繰り返してきた複雑な歴史を持っているにも関わらず、現在も、主に経済的な観点から西ヨーロッパに後れをとっているといえる。そんな東欧にスポットライトを当て、専攻している歴史政治学の観点からも当該地域の理解を深めるために留学を決めた。さらに、留学先であったクルージュがあるトランシルヴァニアは、オーストリア・ハンガリー二重帝国の支配下であった歴史を持ち、2つの世界大戦があった時代においても複数回にわたってその国境が変わった。現在も多くのハンガリー人が暮らしているクルージュで生活することは、民族意識を肌感覚でも知ることができるのではないかと考え、留学先をクルージュに決めた。そしてバベシュ・ボヤイ大学は1581年に創立されたルーマニアで最も古い大学である。そんな豊かな歴史を持つ大学での学びは有意義なものをもたらすと考え、当大学を志望した。さらに別の視点からの理由としては、日本人が少ない場所へ留学することに大きな価値を見いだしていたからというのが挙げられる。留学先を決める際、首都のブカレストを選択することも可能だったが、日本人が少ない地方都市を選ぶことで、より多くの困難に出会うと予想し、それらを通してより大きな幅の成長をしたいという気持ちがあった。



バベシュ・ボヤイ大学



ヨーロッパ学部

4-1. 留学先で学んだこと（授業の様子）

私はヨーロッパ学部所属し、国際関係や地政学、ヨーロッパの概念・哲学等を英語で学んだ。さらに文学部の外国人向けのルーマニア語講座でルーマニア語を勉強したり、留学後半のセメスターでは歴史哲学学部のセキュリティ学科で安全保障の授業をとったりした。驚いたこととしては、物事考える上での視点が常にヨーロッパからルーマニアからであったということだ。そもそも議論の際はヨーロッパが中心に位置している世界地図が用いられ、まるで日本は世界の端に位置しているようである。また例えばウクライナ戦争につい

て議論する場において、「もしロシアが今後モルドバを攻めるとしたらルーマニアはどのような対応をするべきか」や、「今後ウクライナ戦争が拡大した場合、NATO は本当にルーマニアを守ってくれるか」など、EU や NATO、ルーマニアを主語にした議論が多かった。ルーマニアで生まれ育った学生たちの反応も大変興味深く、愛媛大学で以前学んだ学問であっても、こんなにも違う視点や緊張感を得られるのかと驚いた。そして各授業ではディスカッションやディベート、プレゼンテーションが毎回のようであったことも印象的だ。日本の授業システムや試験の方法、教室の雰囲気などの違いに苦勞もしたが、徐々に慣れ、積極的に授業に参加できるようになった。

またルーマニア語の授業については、留学中の第1セメスターで初級コースを、第2セメスターで中級コースをとった。英語ではなくルーマニア語でルーマニア語を教える授業形態と、会話を徹底的に行う授業スタイルのおかげで、日常でルーマニア語を使うハードルが下がったと感じている。同時に外国語学習のあるべき姿も学んだように考える。さらに、外国人向けの講座であったため、ヨーロッパをはじめ多くの留学生に出会い、様々なバックグラウンドを持つ学生と交友関係を築くことができた。



授業の様子(ヨーロッパ学部)



授業の様子(ルーマニア語講座)



課外授業の様子(ルーマニア語講座)

4-2. 留学先で学んだこと（授業外の様子）

私が授業外に取り組んだこととしては主に2つある。

まずはバベシュ・ボヤイ大学日本文化センターでの日本のプロモーション活動である。日本文化や日本語に興味を持っているルーマニア人は多いが、それに直接触れる機会が特に地方都市では少ないのが現状である。私はルーマニア人のボランティアスタッフと、クルージュをはじめとした地方都市での文化紹介や、クルージュ最大のイベント“Zilele Clujului”などを通して能動的に活動した。また、センターの外でも、日本の文化を伝えられる機会を積極的につくった。例えば、知人を通じてクルージュの国連ユースボランティアやJCI（国際青年会議所）の活動に参加したり、知り合いの教師が勤めている学校のサマースクールで日本文化を絡めた活動と一緒にいたりした。折り紙を一生懸命に折る子供の姿や、私が着付けた浴衣姿で何度もお礼を言ってくれる人の姿、日本人を初めて見たと目を輝かせながら日本の好きなのところを伝えてくれる人たちの姿を見ると、とてもやりがいを感じた。そして、そのような活動の中で、様々な地域の県知事や市長、大学関係者などと接触するといったことや、日本大使館や大使と関わる機会も多くあり、実際に外交がどのように行われているのかを垣間見られる機会にもいくつか出会えた。



学校での日本文化紹介



ヤシ市での出張イベント



JCI(国際青年会議所)とのコラボイベント



JCI のイベントで設置した折り紙コーナー



クルージュで最大のイベント”Zilele Clujului”



Zilele Clujului の様子



Zilele Clujului の様子



国連ユースボランティアとの活動



小学校のサマースクール



バイアマーレ市で文化紹介

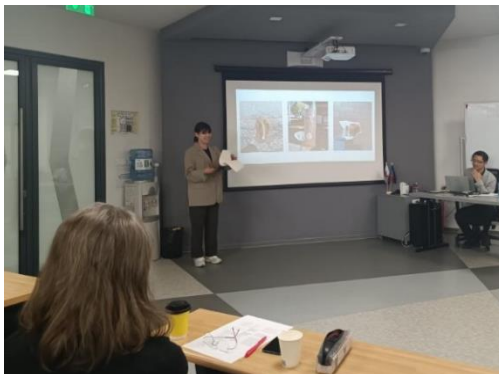


日本大使の講演会



日本大使と Valahia 大学学長との会談

他に努力したこととしては、留学を通して現地に溶け込もうとしたことである。具体的には、日常ではなるべくルーマニア語を使おうとした。英語が話せる若者とばかりと話すこともできたが、現地の言葉を使うことはリスペクトのひとつになると思い、ルーマニア語の習得に励んだ。自分の語学能力を測る手段としては、「外国人ルーマニア語話者の声」というイベントに参加し、自分で決めたテーマをもとにルーマニア語で発表を行い、客観的な意見を貰った。そして、ルーマニアの良いところは、中世の時代のような暮らしが残っていることだという思いから、様々な友人の出身地である村々に赴き、ルーマニアの伝統や昔ながらの習慣を体験する機会を、自分から何度もつくった。どの村の方たちも暖かく出迎えてくれて、友人の家族も家庭料理を沢山ふるまってくれた。村ではなく都市出身の友人の地元巡りの場合も、多くの学びがあった。例えばルーマニア革命がはじまった地であるティミショアラでは、友人の祖父から革命時のリアルな話を聞くことができた。一人でも沢山の場所を訪れ、国内のほぼすべてをまわって色んなルーマニアの一面を感じ取った。そしてまた、同じ学部友人らとはよくルーマニアの政治の話をした。このように、私は、様々な面からルーマニアのことを知ろうと努力し、ルーマニアに溶け込もうと努力した。そして実際に、現地の方々のおかげで多くの知識と経験、成長の機会を得ることができたと感じている。



「外国人ルーマニア語話者の声」の様子



「外国人ルーマニア語話者の声」



友人の地元の皆さんと



ルーマニアの蒸留酒ツイカを飲み
ながら、伝統である豚の屠畜の見
学

5. 現地での生活（住まいや食事）

現地では大学の寮に滞在していた。他の留学生1人とキッチン・バスルーム等を含む部屋を共有して生活していた。普段の食事に関しては、主に自炊をしていたが、友人と外食に出かけることもあった。



レストランで食べたルーマニア料理

6. 留学先で楽しかったこと、辛かったこと、気づき、着いた力

私はこの留学を通して、大変なことすらも楽しみながら、多くの気づきを得た。まずは異文化交流という言葉の深さについてだ。私は日本で生活していた時も様々な国の方と関わる機会に積極的に参加してきた。その過程で、異文化交流を、違う国の人とお互いの素晴らしい文化を伝えあうことと定義してきた。しかしルーマニアに1年間住んでみて、そのような綺麗な言葉では片付かない経験を沢山した。例えば、滞在許可証の取得に関しては、クルージュの移民局はパンク状態だったため、手にするのに半年もかかった他、実際移民局に行

かなければならなかった時は、他の外国人同士のトラブルに巻き込まれそうになりながらやっと移民局内に入れたという困難もあった。また、最初のセメスターで寮の部屋を供給していたルームメイトとは生活習慣が合わないうえに、彼女はフランス語しか話せないという言語の壁がある中、お互いの妥協点や譲れない部分を探らなければならない困難もあった。文化紹介のイベントに来てくれた、ウクライナから避難してきた日本が好きだという少女と、お互いが話せる共通言語がないという中、コミュニケーションを取らなければならない瞬間もあった。異文化を理解する過程に、腹立たしさやしんどさ、もどかしさがこんなにもあるのかと思い知らされながらも、それでも楽しみながら乗り越えることができた。“きれいなもの”以外も多く見てきたルーマニア留学を通して、人間力に関してははずば抜けて成長したと実感している。

上記のような障害がありながらも、私は民間外交の大切さを学んだ。沢山の方から日本の印象の良さを聞くたびに、先人が築いてきた「日本・日本人ブランド」の重さを感じ、私も引き継いでいかなければならないと思った。しかしこれは、国や外交官が行っているいわゆる“外交”だけで作り上げられるのではなく、民間人同士の小さな交流によって積み重ねられるものによって育つものだと気づいた。つまり、一般人である私の言動も日本に対するイメージの形成に大きな影響を与えているということだ。それはいつでも気が抜けないということの意味しているが、振り返ってみると、毎日そのことを意識しながら過ごすことができたと思う。当たり前のことかもしれないが、留学を終えて、私の考える民間外交はやはり重要だったと確信している。ただ同時に、日本のプロモーション力という観点で課題点も見つかった。バベシュ・ボヤイ大学には各国の文化センターがあるが、どの国のセンターも国から補助金が出ているにもかかわらず、日本文化センターはすべてボランティアなのである。大学の文化センターが一堂に会した町のフェスティバルなどを振り返ってみても、プロモーション力の差を大きく感じた。事実、日本の持っているあらゆるポテンシャルは素晴らしいはずで、ルーマニアには大きな需要があるのにも関わらず、できることに限りがあったのは歯がゆかった。センターでの活動は、民間と公の機関が関わるプロモーションの在り方を考えるきっかけにもなった。

そして、この留学を通して着いた力も様々ある。まずは企画・運営力である。地域での日本文化のプロモーションや大学等での大使・大使館職員の方の講演会等の企画・運営に携わる機会を通してつけることができた。加えて、責任を持って何かに取り組むことや、周りを見る力が成長したと考える。次に臨機応変に対応できる力や危機管理能力である。ルーマニアは、日本や西欧と比べて、様々な面でシステムが整っていない。インターネットに情報が載っていないことも、機械が壊れていることも当たり前で、対応してくれない人がいるのも当たり前なのである。そして日本より治安がいいとはいえないルーマニアで、事前に情報がない中行動しなければならぬ時ももちろんある。そんな状況を繰り返す中で、起こりうる様々なパターンを考えて、現地の人に聞きながら準備しつつ、その都度臨機応変に対応していく力が伸びたと考える。そして何より自信が着いたと考える。日本から離れた地での1年

間、挑戦をやめなかったり、困難を楽しみながら乗り越えたり、沢山の成功体験を積んだりすることで、スキルや自分自身の在り方に自信が持てるようになった。

7. 終わりに

渡航前まで成長できるか不安だった留学は、数えきれないほど沢山の出会いと縁に恵まれ、そこから生まれたすべての経験が私を成長させてくれ、自分でも驚くほどの“やりきった”という感情を持って終えることができた。約1年間、毎日全力で過ごしてきた中で、春・夏・秋・冬、それぞれのルーマニアの姿もじっくり味わうことができ、どの場면을切り取っても、心から充実した時間になったと感じている。今後はルーマニアで得た経験を愛媛大学での学びに還元するとともに、将来に向け、さらに人として成長していきたいと考える。

